

# 1741年に蝦夷地・北部日本海沿岸地域を襲った寛保津波

1993年7月、北海道の奥尻島で死者・行方不明者229人に及ぶ大きな被害が生じた北海道南西沖地震による津波災害には、読者の皆さんも大きな衝撃を受けたことと思います。ここに紹介する寛保津波は、それを去ること約250年前の寛保元年（1741年）7月、蝦夷地・北部日本海沿岸地域を襲った大津波として、北海道だけでなく津軽地方でも多くの人々の中で長く記憶されてきました。

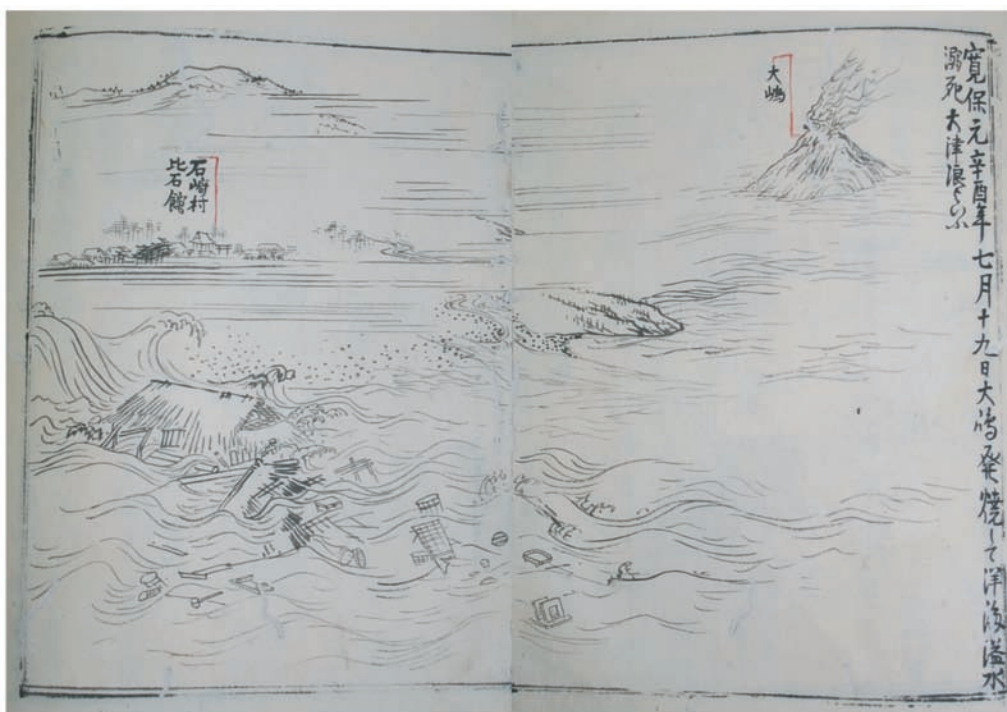
寛保津波を簡単に紹介しましょう。寛保元年7月19日午前6時から8時にかけて渡島半島西岸一帯から津軽、佐渡に至る日本海沿岸を大津波が襲いました。津波の高さは熊石で5～6m、乙部で10～15m、江差・松前で6～8m。津波の被害は渡島半島西岸だけで死者1,236人、流失家屋は729軒に及びました。近世北海道の自然災害で最大の被害を生じた同津波を描く「寛保津波と渡島大島噴火の図」（函館市中央図書館蔵「北海道旧纂図絵」七所収）は、北海道の自治体史にも引用され、よく知られた絵図です。

同図を収録する「北海道旧纂図絵」は、松前藩の家老松前広長の撰著にかかるもので、19世紀後半に成立したと推測されます。つまり、同図は寛保津波の約40年後に描かれたようです。さて図中に記された文言は、「寛保元辛酉年七月十九日、大島発焼して、洋海溢水、溺死、大津浪といふ」と見えます。図の右上

に朱線で渡島大島が指し示され、噴煙を上げている姿が描かれています。左下には津波が襲来して家屋が破壊され、桶・障子・柄杓など日常使用する品々が流失していく様子が描かれています。その上方には同じく朱線で「石崎村比石館<sup>ひいしだて</sup>」が示され、鳥居・神社の建物、家屋が描かれています。津波の原因となる大島噴火と津波襲来の様子、つまり災害の発生から被災に至る時間的経過を、図の中に集約して描いているとみてよいでしょう。図中の「石崎村比石館」は、実は偶然描かれたものではありません。これは、我々が同津波を研究する上でも有効かつ意味のあるメッセージでした。石崎村比石館<sup>たてざき</sup>は、現北海道檜山郡上ノ国町石崎に所在。この館跡は館崎と呼ばれ、標高が19.5m。津波はこの小丘陵を超えて襲来してきたと言いますから、上ノ国町に押し寄せた津波の波高は石崎で約20m超であったことを物語っています。

当図は、渡島大島の噴火を描くことで山体崩壊による津波の発生、石崎村比石館を指し示すことで津波の波高をみごとに表していたのです。寛保津波は、一次史料が「弘前藩庁日記 御国日記」にほとんど限定されており、資料的な制約が大きいことから、今後ここに紹介したような、北海道側からの資史料の発掘と解析が必要となってくると考えられます。

（弘前大学人文学部 長谷川成一）



「寛保津波と渡島大島噴火の図」（函館市中央図書館蔵）